嗚咽

手を伸ばす―――
石畳の隙間の若草
そのやわらかさに触れてみる
冷たい風を宥める陽光
その色彩を想い浮かべてみる

手を伸ばす―――
それを受けとめる掌がある
僕は罪を犯したのか
その温かい掌から
歓びを奪ったのか

手を伸ばす―――
かつて見たことのある
生あるものの
あるいは生のないものの
乱雑に重ねられた色彩

手を伸ばす―――
なぜ手を伸ばしてしまうのか
最後に私が見た
鋭い先端の
冷たいきらめきを

手を伸ばす―――
止める事のできぬ嗚咽
風が邪魔をして
微かな揺れを感じることができない
ひゅう、という音だけがやかましい

手を伸ばす―――

反射し、散乱する陽光に

微かに溶け込んでいる

それは

萌芽の準備であり

再生への回帰であり

そして、また

消滅への出立である

(2010.1.31)